

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02863

研究課題名(和文) グローバル時代を生き抜く力を育成する大学教育 高校からの学習成果移行の観点から

研究課題名(英文) Globalization, and Competencies in Japanese University Education

研究代表者

正楽 藍 (Shoraku, Ai)

神戸大学・国際人間科学部・講師

研究者番号：40467676

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：教育活動の行為者である教職員、および学生が「グローバル社会と学生たちの獲得する力」をどのように意味づけているかを探索することにより、彼らの捉えるグローバル社会で求められる力の現実を明らかにした。

教職員が考えるグローバル社会とは、「地球規模」「世界」という一元的なものではなく、「大学」「地域」「日本」「海外」に広がる重層的な空間である。そして、彼らは、「グローバル社会で求められる力」に対して、海外や世界で活かせる力というように、地球規模であることをことさらに意識するのではなく、ローカルやナショナル、グローバルという水準の枠を超えて活かせる力であると捉えていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、海外留学という行為は教職員や学生によるグローバル社会の捉え方にどのような影響を与えるかを研究したものである。留学という既存の現象に自らの行為を当てはめるのではなく、自らの行動や思考が留学という行為を形成するのであり、よって、行動やそれにより生まれる思考が異なれば、留学の解釈も異なるとの見方を示した。これは、従来の留学研究にはない見方である。

留学はじめ、大学の国際化には膨大な社会的資源が投入されてきた。本研究は、大学教育が生み出す知識が還元される社会がどのような空間かについて、留学教育の行為者の語りを分析することにより明らかにした。

研究成果の概要(英文)：By exploring how faculty, staff, and students, as actors in educational activities, make sense of "global society and the skills that students acquire," this study has clarified the reality of the skills required in a global society as they perceive it. Faculty, staff, and students do not think of global society in terms of "global" or "world," but rather as a multilayered space that extends to "university," "region," "Japan," and "overseas". They see the "skills needed in a global society" not as skills that can be used overseas or in the world, but as skills that can be used across the boundaries of local, national, and global levels.

研究分野：高等教育学関連

キーワード：大学の国際化 グローバル社会 リベラルアーツ

## 1. 研究開始当初の背景

UNESCO (2015) は、教育と教育によって創り出される知識はすべての人に共通のものであり、相互依存が進行する持続可能な社会の実現のためには、教育と知識は地球規模で共有されるべきであるという。Marginson (2019, pp.24-25) は、「グローバルな共有財とは、国境を越えた関係において、また世界全体のレベルで、高等教育や研究から生じる、さまざまな国や人びとに広く行き渡る共通の関係や利益を指す。たとえば、数学の知識や、移動する学生の安全・安心などである」という。では、大学教育の国際化によって生み出される知識や能力がグローバルな共有財であるとはどのようなことか。

グローバルな共有財としての高等教育の性質について、Marginson (2019) は、知識や能力は個人に備わるものであるが、共に生活したり仕事したりするなかで他者に間接的に影響を及ぼし、その影響は組織や社会全体に広がっていくとする。本研究では、影響が及ぶ範囲は必ずしも一様ではなく、どこに、誰に影響が及ぶかの認識は人により異なるとの考えをとる。グローバル化が誰の言葉で語られるか、誰によって捉えられるかによって、グローバル化という事象がどのように見えるかは異なる。たとえば、日本の「グローバル人材」の概念が内包する諸要素は、その活用が想定される空間が日本であるという点で、グローバルリーダーの概念とは性質を異にする(譚 2021)。

## 2. 研究の目的

グローバル社会をどう考えるかの捉え方は人によって異なるものの、グローバル化と高等教育の国際化の議論では、「グローバル社会で求められる力」や「グローバル対応力」、「グローバルな知識」などといわれ、学生が身につけるべき能力としていくつもの、また頻繁に取り上げられる能力(たとえば、異文化適応力、コミュニケーション能力、協働)がある。しかし、グローバル化の捉え方が多面的であることは、「グローバル社会で求められる力」の認識にも個人の主観が入っているということであろう。つまり、教育活動の行為者がグローバル化をどのように認識しているかによって、彼らが考える「グローバル社会で求められる力」の意味は異なる。しかしながら、この点について言及している先行研究は管見の限りにおいて確認できない。

そこで、本研究の目的は、教育活動の行為者である教職員、および学生が「グローバル社会と学生たちの獲得する力」をどのように意味づけているかを探索することにより、彼らの捉えるグローバル社会で求められる力の現実を明らかにすることである。この目的を達成するために以下の課題を設定する。(1) 留学必須のプログラムをもつ学部の方針は「グローバル社会で求められる力」としてどのような能力を重視しているか、(2) 教育活動の行為者である教職員、および学生はそれらの能力が生かされる社会的空間をどのように捉えているか、(3) 教職員、および学生は、それらの能力をどのように意味づけているか、の3点である。

## 3. 研究の方法

グローバル化の進行に伴って、知識基盤型の職業が増加するなかで、リベラルアーツ教育の重要性は高まっている(Chenga & Wei 2021; Godwin & Altbach 2016)。本研究では、現代をグローバル化された社会と捉えて、大学教育の生み出す知識や能力には国際的、および多文化間における社会貢献も求められていることに鑑みて、リベラルアーツを「国際教養」と読み替えて、国際教養系学部を焦点を当て、そこで重視されている能力について検討する。本研究では、国内の四年制以上の大学のうち、在学中の海外留学を卒業の必須要件とし、かつ一学期間以上の留学プログラムをもつ11の国際教養系学部のディプロマ・ポリシー(DP)のテキスト分析、および11学部のうち7学部の教職員、および学生を対象としたインタビュー調査の内容分析を行った。

教職員へのインタビュー調査は、2021年11月~2022年3月、7学部10名の教職員を対象に実施した。学生へのインタビュー調査は、2022年2月~4月、35名に対して実施した。インタビューでは、DPのテキスト分析によって抽出したコード(後述)と、「グローバル」「グローバル化」という語から関連付けられる社会的空間の認識について質問を行った。この社会的空間に関しては、町村(2015)がグローバル化段階の空間モデルで示した「ローカル」「下位国家的リージョナル」「ナショナル」「超国家的リージョナル」「グローバル」という水準(スケール)を参考に分類し、分析のコードとした。DPのコード、およびグローバル化の社会的空間の分類コードにもとづいて、インタビュー・データのコーディングを行い、その後、内容分析を行った。育成しようとする学生の力と対比させながら、留学教育の行為者(インタビュー調査への協力者)の認識するグローバル化の社会的空間について整理する。

## 4. 研究成果

学生へのインタビュー調査のデータは現在分析中のため、ここでは、教職員へのインタビュー調査について報告する。

### 4.1. DPに見るグローバル社会で求められる力

国際教養学系の11学部のDPを内容別に分類し(定性的コーディング)、さらに同様のテーマ

を集める作業(再文脈化)を行った。その結果、「情報」「協働(他者と協働する、等)」「知識(幅広い知識と教養をもつ、等)」「思考」「文化(異文化や多文化、日本文化を理解する、等)」「コミュニケーション」「問題(国際社会の諸問題の解決に取り組む、等)」「国際」という8コードに集約された。

これらのコードの頻度を見ると「問題」(26.1%)、「文化」(23.3%)、「コミュニケーション」(13.3%)、「知識」(12.8%)、「協働」(11.1%)が高かった。つまり、知識や異文化理解を高め、他者とのコミュニケーションを通して協働することが必要不可欠であり、これらの能力を身につけた上で、地球規模の問題の解決に取り組む意志や能力をもつ人を育てようとしていることが分かる。

#### 4.2. 教職員の捉える社会的空間

教職員が捉えている社会的空間を知るために行った質問「“グローバルな”と表現するとき、どのような空間を念頭に置くか?」「留学を経験した学生たちが、将来活躍する社会とはどのような所、または空間か?」などへの回答を、「ローカル(教職員の勤める大学が所在する市町村、または海外の特定の都市)」「下位国家的リージョナル(都道府県、または地方区分)」「ナショナル(日本、海外の国家)」「超国家的リージョナル(国家の集合体)」「グローバル(国家やそれらの集合体に縛られない広範な世界・地球の見方)」という水準で分類した。

ローカルな水準では、留学先の具体的な都市や地域を念頭に置いて回答されることが多い一方、ローカルな地域と地域を結ぶという社会空間をグローバルに捉えている側面も見られた。

下位国家リージョナルに関する回答では、DPが想定する社会的空間として、大学の所在する都道府県が想定されてはいるものの、学生の卒業後を見ると当該都道府県に直接的な貢献をしているとはいえない状況がうかがえた。

ナショナルな水準では、学生の経験のなかに見られる国家が語られていた。また、「日本」に限定すれば、海外から日本を相対化して見ることで日本を再認識・再発見することに意義を感じている語りが複数の教職員から確認できた。

超国家リージョナルに関連する語りでは、留学先でその国の学生だけでなく、そこに集う近隣諸国の学生たちとの交流が想定されている。

「グローバル」という語は、「地球全体の」「世界的な」と訳されるが、今回のインタビュー調査の回答を見ると、回答者によって様々な次元で「グローバル」を捉えている様子が見られた。たとえば、物事を見る視点をグローバルと表現する回答者や、思考や態度について言及する回答もあった。

#### 4.3. 教職員による意味づけ

教職員による「グローバル社会で求められる力」の意味づけについて、DPとインタビューの回答から検討していく。

##### 4.3.1. 文化

一部の学部のDPは、「日本」や「周辺地域」「アジア」といった特定の国や地域に言及しているものの、異文化や多文化を理解する能力は国や地域の枠組みからは離れて必要とされるものと考えられていると解釈できる。

I大学のDPの一文は「多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球社会に主体的に貢献できる人材を育成する」であり、学生の知識や能力が影響を及ぼす範囲は地球社会であると表現されている。教職員インタビューの分析で「グローバル」と「文化」コードが重なって付された箇所は11か所あり、「75億人がいていろいろなおいがある。学生にはそのにおい、異なる言語、様々な文化を感じてもらいたい」(I大学教員)、「他国の文化を勝手に想像したり、国をイメージしたりするのはなく、そこで暮らす人びとを想像して異文化に接することで差別や偏見がなくなっていく。それが多文化共生の本質」(K大学教員)という捉え方が見られる。人を理解することが異文化理解であり、いずれの国や地域かはそれほど重要ではないと捉えられていると解釈できる。

A大学の教員も社会の本質を国に置いておらず、また、卒業後に学生がよって立つ場所も特定の国を想定しておらず、「グローバル人材は経済に貢献する人、海外駐在員候補を育てるのがグローバル人材の育成であろう。学生には、グローバル人材ではなく、グローバル市民となることを意識してほしい」と話す。

他方、「超国家的リージョナル」と「文化」コードの両方が付された箇所は1か所のみであり、「学生は、海外旅行では欧米へ行くことが多い。(だから、本学部の海外研修では)東アジアや東南アジアといった、行ったことのない近隣の国へ行かせる。そこでのカルチャーショックが次の学びにつながる」(F大学教員)である。「近隣諸国について知ったうえで視点を世界へ広げていく。要するに、カリキュラム上では、日本を軸に進めてきた」とも話す。F大学のDPにも、「日本とアジアを中心とした地域を基盤に、世界を知り相互理解を深め」とあり、世界や地球社会への視点の広がり方がほかの大学のDPや教職員の認識とは異なる。

##### 4.3.2. 知識(言語)

グローバル人材育成やそのための大学改革と関連して、吉田(2014)は、日本の大学の国際化改革はつまるところ、英語を話せる海外留学経験者を増やすことであり、欧米へのキャッチアップを目指すことではないと批評する。DPでは、「言語運用能力をもつ」(7.2%)、「外国語(英語以外)によるコミュニケーション能力をもつ」(2.8%)、「英語によるコミュニケーション能力をもつ」(2.8%)のコードを付された文章は、全体のなかではそれほど多くなく、また、英語偏

重とはいえない。しかし、教育環境についての教職員の言葉からは DP の表現とは異なる様子が見えてくる。「大学の国際化、グローバル化イコール英語という傾向が強い」(J 大学教員)、「欧米、英語を話す国への留学というイメージはなきにしもあらず」(A 大学教員)というように、英語圏を中心とする先進主要国への留学、英語でのコミュニケーションという大学の体質がある。これは、小学校から高校までの学校教育の中で、英語が科目として教授されているために、英語が馴染みのある外国語となっている背景もあるだろう。また、外国人教員等として一括りにされる外国人、および外国の大学で学位を取得した教員、外国で教育研究歴のある教員の積極的な採用、英語を媒介とする授業の実施といった、大学の教育環境整備への取り組みが影響しているであろう。

しかし、教職員個人の意識、また、彼らが見る学生の意識は必ずしも英語圏を中心とする先進主要国か、その他の国や地域かという二項対立ではない。世界共通語の英語の価値や重要性を認めながらも、彼らの意識が英語圏へ絶対的に向いているわけではない。「(学生は英語を媒介とする授業を受講することで)英語は単なるツールにすぎない、第二言語は一生第二言語なのだと思いつく。英語に対する見方の転換が大きな意義」(K 大学教員)というように、英語という言葉と先進主要国を一体として捉えるのではなく、相対的に価値あるものと認識させようとしていることがうかがえる。

#### 4.4. 考察

DP に見たグローバル社会で求められる力は、「知識」「異文化理解」「コミュニケーション」「協働」に関する力を身につけた上で、問題の解決に取り組む意志や能力であるということが分かった。教職員が考えるグローバル社会とは、「地球規模」「世界」という一元的なものではなく、「大学」「地域」「日本」「海外」に広がる重層的な空間である。そして、彼らは、「グローバル社会で求められる力」に対して、海外や世界で活かせる力というように、地球規模であることをことさらに意識するのではなく、ローカルやナショナル、グローバルという水準の枠を超えて活かせる力であると捉えている。

今や大学はグローバル人材育成の主体であり、大学改革なくしてグローバル人材の養成はなしえないとまでいわれるようになった。しかし、我々のインタビュー調査では、教職員によるグローバル人材の捉え方はこの言葉の元始とは異なるものであった。たとえば、「あえてグローバル人材といわなければならないのが日本の宿命」(I 大学教員)や、「学生にはグローバル人材を批判的に、俯瞰的に捉えて社会に出てほしい」(A 大学教員)のように、一般的にいうグローバルとグローバル人材とで、教職員の捉え方、そして学生への期待の違いが見られることがうかがえる。また、「産業界が求めているグローバル人材になるためという考えは、学生の間では恐らくないと思います。」(K 大学教員)と述べているように、学生たちもそれを求めていないと認識している状況がうかがえた。これは、大学の国際化という潮流に乗るのではなく、クリティカルな視点をもって留学プログラムに取り組む教職員の姿勢と考えられる。

#### 参考文献

- Chenga, Leonard K. & Wei, Xiangdong, 2021, "Boya education in China: Lessons from liberal arts education in the U.S. and Hong Kong," *International Journal of Educational Development*, Vol.84, 102419.
- Godwin, Kara A. & Altbach, Philip G., 2016, "A Historical and Global Perspective on Liberal Arts Education: What Was, What Is, and What Will Be," *International Journal of Chinese Education*, Vol.5, pp.5-22.
- 町村敬志, 2015, 「リスリーングの視点から統治の再編を考える」『*学術の動向*』20 巻 3 号, pp.73-79.
- Marginson, Simon, 2019, "Global Cooperation and National Competition in the World-Class University Sector," Y. Wu, Q. Wang, and N. Cai Liu eds., *World-Class Universities: Towards a Global Common Good and Seeking National and Institutional Contributions*, Brill, pp.13-53.
- 譚君怡, 2021, 『日本高等教育における「グローバル人材」育成力 留学生の自己形成過程の視点から』東信堂。
- UNESCO, 2015, "Rethinking Education: Towards a global common good?," UNESCO Publishing.
- 吉田文, 2014, 「『グローバル人材の育成』と日本の大学教育 議論のローカリズムをめくって」『*教育学研究*』81 巻 2 号, pp.164-175.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 正楽藍	4. 巻 31
2. 論文標題 大学初年次生の捉えるグローバル・スタディーズ 自己評価に基づく学習成果の事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大學教育研究	6. 最初と最後の頁 101～114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋春菜・杉野竜美・徳永俊太	4. 巻 0
2. 論文標題 イタリアの学校：多様な連携から創造する学校	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 世界の学校：グローバル化する教育と学校生活のリアル（二宮皓編著、学事出版）	6. 最初と最後の頁 52～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉野竜美	4. 巻 23（2）
2. 論文標題 学生の視点から見たオンライン授業 学習効果と課題について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸医療未来大学紀要	6. 最初と最後の頁 17～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 正楽藍	4. 巻 30
2. 論文標題 留学必須の学士課程教育プログラムに関する一考察：グローバル化する社会と大学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大學教育研究	6. 最初と最後の頁 65～82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 正楽藍	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 公教育における非国家主体の「役割」：カンボジアの前期中等教育の教員と私塾に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際教育協力論集	6. 最初と最後の頁 53～67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 45
2. 論文標題 国立大学における「不本意入学」の実態：入試形態・ジェンダー・学部・大学階層に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 131～135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 32
2. 論文標題 「対人型入試広報」の効果と不参加要因をめぐる試論：アドミッション・ポリシーの認知と高校時代の学習態度に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 312～317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sakurai Yusuke, Shimauchi Sae, Shimmi Yukiko, Amaki Yuki, Hanada Shingo, Elliot Dely Lazarte	4. 巻 0
2. 論文標題 Competing meanings of international experiences for early-career researchers: a collaborative autoethnographic approach	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Higher Education Research & Development	6. 最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/07294360.2021.2014410	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 正楽藍	4. 巻 第29号
2. 論文標題 留学・海外研修必須の学士課程教育プログラムに関する一考察 海外留学による能力の獲得	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育研究	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋春菜・杉野竜美・徳永俊太	4. 巻 0
2. 論文標題 イタリア共和国	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海外教科書制度調査研究報告書	6. 最初と最後の頁 243-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shimauchi, Sae and Kim, Yangson	4. 巻 33
2. 論文標題 The Influence of Internationalization Policy on Master 's Education in Japan: A Comparison of "Super Global " and Mass-Market Universities	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Higher Education Policy	6. 最初と最後の頁 689-709
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 嶋内佐絵	4. 巻 第53集
2. 論文標題 韓国における「国際」的で「学際」的な学士課程の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学論集	6. 最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 正楽藍	4. 巻 第28号
2. 論文標題 大学生の留学動機と学習成果 汎用的技能に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育研究	6. 最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米澤彰純、嶋内佐絵、劉靖	4. 巻 86
2. 論文標題 東アジアにおける「大学」概念の形成と変容：機能としてのトランスレーションに注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 225 ~ 236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11555/kyoiku.86.2_225	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 第27号
2. 論文標題 高等教育段階の留学をとらえる教育社会学の理論的展開：日本への援用可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育研究	6. 最初と最後の頁 9-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 第41巻第1号
2. 論文標題 日本人学生の留学経験は就労後の所得を高めるか 大学教育における留学の意義再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 小林元気	4. 巻 第26号
2. 論文標題 高卒後の進路における海外大学進学志向の規定要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本高校教育学会年報	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 第19号
2. 論文標題 英語教育改革と海外留学促進政策における『教育の福音』のレトリック：海外留学の促進をめぐるイデオロギーの批判的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 第24号
2. 論文標題 日本人学生の留学経験の職業的レリバンス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 留学生教育	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林元気	4. 巻 第48号
2. 論文標題 ペアレントクラシー時代における親の幼稚園選択の形成要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 正楽藍・杉野竜美
2. 発表標題 留学教育の行為者によるグローバリゼーション像の多元性
3. 学会等名 日本教育社会学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 正楽藍
2. 発表標題 国際系学部教育方針に見るグローバル社会における大学の役割
3. 学会等名 日本比較教育学会第58回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林元気
2. 発表標題 大学生の生育歴における留学志向形成プロセスの4類型
3. 学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shimauchi, Sae and Kim, Yangson
2. 発表標題 The Influence of Internationalization Policy on Master's Education in Japan: A Comparison of ' 'Super Global' ' and Mass-Market Universities
3. 学会等名 広島大学高等教育研究開発センター2020年度第11回公開研究会「東アジアの修士教育と新型コロナウイルスの影響」（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 正楽藍
2. 発表標題 カンボジアの前期中等教育における学外補習指導に影響を与える諸要素に関する研究
3. 学会等名 日本比較教育学会第55大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 正楽藍
2. 発表標題 留学生・留学経験者のキャリアについて
3. 学会等名 日本教育社会学会第71回大会 若手研究者交流会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉野竜美
2. 発表標題 イタリアにおける教師教育プログラム：異文化教員の養成と研修
3. 学会等名 日本比較教育学会第55大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 YONEZAWA Akiyoshi, WESTERHEIJDEN Don, SNIJDER Jorrit and SHIMAUCHI, Sae
2. 発表標題 Transformation of Undergraduate Education under Globalisation: A reflection on the Global Studies in higher education
3. 学会等名 Consortium of Higher Education Researchers 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMAUCHI, Sae and KIM, Yangson
2. 発表標題 Dynamism of Internationalization of Master 's Education in Japan
3. 学会等名 World Education Research Association 2019 ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKURAI Yusuke, SHIMAUCHI Sae, HANADA Shingo, AMAKI Yuki and SHIMMI Yukiko
2. 発表標題 Preliminary findings on the meaning of global mobility experience for the career development of early-career researchers: Autoethnographic approach
3. 学会等名 World Education Research Association 2019 ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIMAUCHI, Sae and KIM, Yangson
2. 発表標題 Dynamism of Internationalization of Master 's Education in Japan
3. 学会等名 Comparative International Education Society 2019 ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林元気
2. 発表標題 大学生のライフヒストリーにおける短期留学志向の形成プロセス
3. 学会等名 日本教育社会学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嶋内佐絵
2. 発表標題 大学の『国際化』の教育社会学的検証 学際化・英語化に注目して
3. 学会等名 九州大学国際センターFD講演（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林元気
2. 発表標題 グローバル化時代のキャリア形成
3. 学会等名 延岡星雲高校1年生進路講話（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Internationalising Japan's higher education sector  <a href="https://www.eastasiaforum.org/2020/02/18/internationalising-japans-higher-education-sector/">https://www.eastasiaforum.org/2020/02/18/internationalising-japans-higher-education-sector/</a></p> <p>「第1章 学習環境とイノベティブな実践」杉野竜美・武寛子・山内乾史訳、『学習の環境 イノベティブな実践に向けて』（OECD教育研究革新センター編著 立田慶裕監訳）</p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉野 竜美  (Sugino Tatsumi)  (40626470)	神戸医療福祉大学・人間社会学部・教授    (34528)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	嶋内 佐絵  (Shimauchi Sae)  (80727107)	東京都立大学・国際センター・准教授    (22604)	
研究分担者	小林 元気  (Kobayashi Genki)  (10878143)	鹿児島大学・総合教育学系中等・高等教育接続センター・准教授    (17701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関